

佳作

テーマ3…多様性を認め合う社会をめざして 「働く人の多様性」

山形県立米沢興譲館高等学校1年 藤村愛依

「介護福祉士の資格をとる。」

母は唐突にそう言った。去年の冬のことだった。老人ホームで働いていた母なのだから、介護に関わる資格をとりたいと思うのは普通の流れなのかもしれない。しかし私は、母の言葉が信じられなかった。耳を疑った。なぜなら、母は、中国人だから。

私の母は中国人だ。日本人の父と結婚し、日本で生きている。日本語の読み書きはあまり得意ではないが、今まで様々な仕事について働いてきた。私は、母国ではない国でも働いて生き活きと過ごす母はかっこいいと思ってきたし、数年前についた介護職も、人と話すのが好きな母には天職なのではないかと密かに思っていた。しかし、資格をとると聞いたときには、疑ってしまっただ。資格をとるなんて、日本語の読み書きが得意でない母にできるのか。そう思わずにはいられなかった。しかし、今は思う。私の考えは浅はかで、偏見でいっぱいだったと。

父は、母の背中を押した。私も、疑念を抱きながらも母を応援した。そうして母は、資格取得のための勉強を始めた。参考書が届いたとき、私はその難しさに驚いた。しかし母はひるまなかった。毎日、学生のように参考書とにらめっこをしていた。文章の内容は理解できずとも、持ち前の記憶力を活かし、とにかく読んでいた。ふと、母はこうして日本語も覚えてきたのだろう、と感じた。一心不乱に、死にもの狂いで、母の姿を毎日見た私は、もう、母にできないことなんてないように思えてきた。最初の疑念など、全て吹き飛んだ。チャンスは誰にでも平等にある、そう感じた。中国人だから無理じゃないか、と思っていた過去の私が恥ずかしかった。

母の職場の人達は、資格をとろうとする母を応援しているようだった。

遠くの研修に行かなければならないとき、いつも車に母を乗せて行ってくれる人がいた。母はその人と仲が良く、今でもその人の話をよく聞く。あるとき、その人が家に来て、挨拶した私にこう言った。

「あなたのお母さん、素晴らしい人よ。資格をとるための勉強をしているなんて、本当にすごいと思うわ。」

母は照れくさそうに笑っていたが、その人の言葉には、母への人としての尊敬がにじみ出ていた。「中国人なのに」とは言わなかった。深い配慮を感じる言葉だった。見てくれている人がいる。母が資格をとると言った影には、こんな職場の雰囲気もあったのだろうと思う。誰かの挑戦を、応援する、その雰囲気も母の挑戦を後押しした、そう思えてならなかった。

「仕事」は大きな人生の柱だと私は思う。今、私が学生として勉強しているのも、それが学生の仕事だからだ。私が将来社会人として仕事をするとき、その職場は、多様性を認め合える職場であってほしい。母のように、母国ではない地で挑戦する人を応援できる場所であってほしい。外国から来た人も、他の人も、認め、支え合う職場で働きたい。

多様化が進む社会を私は生きている。外国人が活躍する場も少なからずあるだろう。そういう場所は、もっと増やしていくべきだ。言葉の壁を乗り越え、挑戦しようとする人達を応援していきたい。そうして挑戦する人が増えれば、高齢化に悩まされる社会はきつともっと明るく温かいものになるだろう。多様な人が支え合い働く社会をつくっていききたい。

母は、来年の夏に向けて今も勉強している。私も一生懸命母を応援するつもりだ。